

G.F.リーバーマンの『アメリカン・ジョーク 3500』における人間の真実と生き方の文化

岡田春馬

ジェラルド F. リーバーマン著『アメリカン・ジョーク3500』(Gerald F. Lieberman: *3,500 GOOD JOKES FOR SPEAKERS*, Dolphin Books, Doubleday & Company, Inc., 1975)に収録されている、家庭、友人、商売、女と男、子供、結婚、スポーツなど15項目に関する3,500のジョークの中から、人間の真実と生き方の文化という観点から、特に、結婚と、女と男という2項目から52篇を選び出し、訳とコメントをつけることにした。

ところで、筆者が敢えて、このような異文化を紹介することを思い立ったのは、リーバーマンのジョークは単に面白いと言うだけでなく、人間の心の奥深くに内在する、いわゆる、人間の真実なるものが、リーバーマン独特の想像力と洞察力で見事に看破されていると思ったからである。

恐らく、ここに選び出された52篇のジョークは、単なる異文化理解にとどまらず、我々の日常会話とか、スピーチを楽しいものにし、人間関係に潤いをもたせてくれるばかりでなく、延^ひいては、人間の真実と、生き方の文化を考えてゆく上において、大いに役立つことであろう。

(I) 結婚に関するジョーク

① Matrimony is the process whereby love ripens into vengeance.

「結婚というのは、愛が熟して、復讐に変わる過程である。」

これは、結婚に関する、残酷きわまるジョークであるが、現実には、このような皮肉なケースは、残念ながら非常に多い。

② She's such a lousy cook. Her husband is so thin, when he holds his hands over his head he looks like a fork.

「彼女は、料理がへたくそなんだ。だから、彼女の夫は、がたがたに痩せているんだ。それで、奴さんが両手を頭の上に上げると、まるでフォークみたいに見えるんだ。」

これは、料理の下手な妻の亭主の、哀れな姿を露骨に表現したジョークである。

③ I saved her and she married me. That's gratitude.

「僕は、彼女を救助してやったんだ。だから、彼女は、この僕と結婚してくれたんだ。要するに、感謝のお礼という訳さ。」

これは、結婚というものはギブアンドテイク（正しくは、^{ギバントイク} [gívbəntóik]) によるものであるということを、ユーモラスに表現した、痛快にして、かつ、合理的なジョークである。

④ Husbands are like photographers. All they ask you is to keep still and look pleasant.

「夫というのは、写真家みたいなもんだね。夫が妻に要求するのは、黙って、じっとしていて、しかも、にっこり笑っていることなんだ。」

これは、夫というものの地金、つまり、エゴイズムを皮肉った、愉快なジョークである。

⑤ “Young man,” said the matron to the hotel employee, “would you find my husband?”

“I’m a bellboy,” he replied. “Not a bloodhound.”

「年配の既婚夫人がホテルの若い従業員に向かって、<ねえ、あんた、わたしの夫を探してきてくれない>と言った。すると、従業員は<僕はベルボーイなんです。ブラッドハウンド（主として、搜索などに使われる、鋭い嗅覚をもった大型犬）なんぞではありません>と、きっぱり断った。」

これは、意地の悪い、若いホテルの従業員が、ベルボーイとして課せられた任務を楯にして、年配の凶々しい夫人客に逆振じをくわせるといった、じつに痛快なるジョークである。

⑥ I always believed that opposites should marry. She’s rich and I’m poor.

「僕は、かねがね、正反対の者同志が結婚すべきだと考えていたんだ。だから、彼女が金持ちで、この僕が貧乏なんだ。」

これは、腑甲斐ない夫が、自らの甲斐性^{かいしょう}のなさを正当化する滑稽なジョークである。

⑦ She: “Don’t you think we should get married?”

He: “I’d love to, darling, but I won’t be able to afford a home for years and years.”

She: “Couldn’t we go and live with your parents?”

He: “That’s impossible. My parents are still living with their parents.”

彼女：〈あなた、私たち、そろそろ、結婚すべきだと思わない〉

彼：〈うん、僕もぜひ結婚したいと思うんだが、何年も、何年も先にならないと、家を持つ余裕ができないんだ〉

彼女：〈だったら、私たち、あなたの両親と同居できないのかしら〉

彼：〈それがだめなんだ。僕の両親が、まだ、両親の両親と同居しているんだから〉

これは、甲斐性のない男が、結婚を徒らに引き延ばす理由を、出任せ^{でまか}て捏^でっち上げた、コミカルなジョークである。

⑧ A husband is a no-good drunken bum who a woman wouldn’t give a nickel for. But when he gets hit by a car his price immediately goes up to \$ 50,000.

「妻にとって、夫なんていうのは、1枚のニッケル（5セント白銅貨）にも値しない、役立たずののんだくれなんだが、いったん車にはねられたとなると、話は変わる。途端に、夫の価値は、5万ドルにはね上がってしまうのである。」

これは、妻の夫に対する価値評価というのは、しょせん、打算に基づくものであるという意味のジョークである。

⑨ “I want some arsenic for my mother-in-law.”

“Have you a prescription?”

“No, but here’s her picture.”

<僕は、義理の母に飲ませる砒素^{ヒソ}が欲しいんだが>

<処方箋をお持ちですか>

<いや、持ってはいないけど、彼女の写真は持ってきたんだ>

これは、意地の悪い女の内面の心理というのは、そのまま、ずばり、顔に現われるものであるという意味のジョークである。

⑩ “How could you endure talking to that homely woman without laughing in her face?”

“That’s easy. She’s my wife.”

“Oh. My mistake.”

“No, mine.”

「<君は、どうして、あんな不器量な（ブスの）女と、面と向かって、笑いもせず、我慢して話をするのでいいのかね>

<そりゃ、何でもないよ。だって、あれは、俺の女房だもの>

<いや、これは、どうも失礼した>

<いや、僕の方こそ>

これは、蓼食う虫も好き好きという諺をリアリスティックに表現した、皮肉なジョークである。

⑪ She ranted and raved. She complained and pleaded. She cried and threatened. “You think I treated you like a dog,” her husband remarked.

“NO!” she screamed. “A dog has a fur coat.”

「彼女は怒号したり、わめいたりした。彼女は不満を言ったかと思うと、懇願したりもした。彼女は泣いたかと思うと、おどしたりもした。そこで、夫は<君は、この俺が、君を今まで、犬のように扱ってきたと

でも、思っているんだろう」と言った。すると、彼女はくいいえ、そんな風には、絶対思っていないわ。だって、犬はちゃんと、毛皮のコートを持っているんですもの」と言った。」

これは、妻が夫のどけちぶりに逆襲した、皮肉たっぷりのジョークである。

⑫ Marriage may be the real road to happiness, but there are a lot of good side trails.

「結婚というのは、幸福への正道かもしれないが、しかし、たくさんの良い側道もあるにはある。」

これは、男の遊び心を暗示する、微妙なニュアンスを秘めたジョークである。

⑬ The poor woman lay crying on her psychiatrist's couch. "We were married twenty-five years before he died," she said, dabbing away a mournful tear. "Never had an argument in all these years."

"Amazing," said the doctor. "How did you do it?"

"I outweighed him forty pounds and he was yellow."

「1人の女性が、可愛そうにも、精神分析医の寝椅子の上に寝て、泣いていた。<私たち、あの人が死ぬまで、25年間結婚していたんです。その間、私たちは1度も喧嘩したことはなかったんです>と彼女は悲しみの涙を拭きながら言った。

そこで、医者<それはすごいね。どうして、そんなことができたんだね>と聞いた。

すると、彼女は<私の体重の方が、夫より40ポンド上回っていたし、

それに、夫は臆病だったからなんです」と答えた。」

これは極端な体格差による、異様な夫婦関係を、ユーモラスに皮肉った、痛快なジョークである。

⑭ **After five months of marriage she presented her husband with a seven-pound baby boy. “Me thinks this is a bit early,” he remarked.**

“No,” she said. “We only a bit late.”

「5カ月の結婚生活の後、彼女は夫に、7ポンドの男の赤ちゃんをプレゼントした。すると、夫は「これはちょっと、早過ぎるんじゃないかな」と言った。

これに対し、彼女は「いいえ、ちっとも早過ぎやしないわよ。私たちの結婚が、少し遅れていただけなのよ」と言った。」

これは、妻が婚前交渉の結果を、正当化するための口実を皮肉ったジョークである。

⑮ **Women try their luck, men risk theirs.**

「女は運を試すのに対し、男は運を賭ける。」

これは、結婚にかける、男女の夢の違いを皮肉ったジョークである。

⑯ **When I married her she looked like a slender birch. Now she looks like a knotty pine.**

「俺が結婚した時、あれ（女房）は、ほっそりとしたカバの木みたいだった。が、今では、あいつ、まるで、節だらけの松の木みたいだ。」

これは、結婚前と結婚後の女性の体の、つまり、体形のグロテスクな変化を滑稽に皮肉ったジョークである。

⑰ **The missus was angry when he came home.**

“I saw you wink at that girl this morning.”

“Something got in my eye.”

“Something got in your car too.”

「彼が帰宅した時、妻はぷりぷり怒っていた。＜私、あなたが、今朝、あの女にウインクするのを、ちゃんと見たわよ＞
＜何だか知らんが、目に何かが入ったんだよ＞
＜何か、あなたの車の中にも、入っていたようだったわよ＞

これは、妻が夫の不倫をユーモラスに^{なじ}語る、痛快なジョークである。

⑱ **I hit my wife. Terrible thing happened then. The chair broke.**

「僕は妻をなぐった。すると、恐ろしいことが起きたんだ。何と、椅子が壊れたんだ。」

これは、妻の太った巨体を、面白、おかしく皮肉ったジョークである。

⑲ **Marrying for money is better than marrying for no reason at all.**

「金目当ての結婚の方が、ぜんぜん理由なしの結婚よりはずっとましである。」

これは、どうせ結婚するなら、たとえ打算でも良い、はっきりとした

目的があった方が、まるっきりないよりはましであると言う意味のジョークである。

⑳ **He married a checkroom girl. Every time he goes out of the house he has to give her a quarter for his hat.**

「彼は、チェックルーム（駅や食堂の携帯品一時預かり所）で働いていた女の子と結婚した。それで、彼が家から出る時はいつでも、その都度、彼女に1枚のクォーター（25セント銀貨）をやらなければならないんだ。」

これは、女の素性は、いつまでたっても変わらぬものだとすることを、皮肉ったジョークである。

㉑ **She may be an heiress but she looks more like an heirloom.**

「彼女は、女相続人かもしれないが、彼女を見ていると、何だか、相続動産みたいに見える。」

これは、法的相続動産を少しでも減らすまいと、懸命になって守り続ける女の律儀さと言うか、けなげさを皮肉ったジョークである。

(Ⅱ) 女と男に関するジョーク

① **My wife is a smart woman. She works for my uncle. Her job is to sit in the car and smile at cops.**

「女房は、頭が良くて、しかも、格好の良い女なんだ。あれは、いま、叔父のところで働いているが、仕事は、もっぱら車の中に座っていて、

警官を見たら、にっこり微笑^{ほほえ}むことなんだ。」

これは、俺の女房は色気のある美女だということを、ユーモラスに吹聴したジョークである。

② **Women are like champagne. The older, they are the better they get. Like my wife. She's fermenting.**

「女というものは、シャンペンと同じようなもんだね。つまり、年をとればとるほど、よくなるんだ。丁度、わしの女房みたいにね。あれは、いま、発酵中というところなんだなあ。」

これは、何十年も連れ添っている女房のことを、半ば自慰的に、しかも、ユーモアたっぷりに皮肉ったジョークである。

③ **The man reported his wife missing and now a detective was at his home to get a complete description. "Can you tell me the color of her hair?" he asked.**

"I'm not sure," he replied. "She disappeared right after a beauty parlor appointment."

「奴さんは、細君が行方不明になったことを、警察に届けたんだ。それで、いま、刑事が奴さんの家に、細君の詳細な人相書きを作成するために、いろいろ細かいことまで聞きに来ているんだ。例えばだね、刑事はくところで、奥さんの髪の毛の色は、何色かね」と聞いたんだ。

すると、奴さんの答えが、また、じつに振るっているんだ。<さあ、それがその一、はっきりよく分からないんです。何しろ、あいつは美容院の予約を取った直後に、姿をくらましたもんですからね>」

これは、家出をしてしまった、友人の浮気な女房の変身ぶりを皮肉った、愉快的ジョークである。

④ **She stands in front of the mirror for hours and admires herself. She calls it vanity. I call it imagination.**

「彼女は何時間も、鏡の前に立って、自分の美貌を賛美している。彼女は、これを、自惚れだと考えているが、ぼくは、それは、しょせん、想像にすぎぬと思っているんだ。」

これは、自分の女房の美貌に対する自惚れなんていうのは、単なる想像にすぎぬと揶揄したジョークである。

⑤ **“This hat makes you look ten years younger.”**

“How old are you?”

“Twenty-nine.”

“I mean without the hat.”

<この帽子をかぶると、あなた様は、10歳お若くお見えになります
が>

<本当は、おいくつでいらっしゃいますか>

<29歳ですわ>

<いや、私が申し上げているのは、帽子をかぶらないで、おいくつな
んですかと言う意味なんです>

これは、女性の、自分の顔に対する自惚れと年齢に対する執着心は、
相当なものであるということを皮肉ったジョークである。

⑥ **Her mouth is so big... it takes two men to kiss her.**

「彼女の口は、えらく、でっかいから、彼女とキッスするには、何だね、男が2人がかりでやらなくっちゃできないね。」

これは、自分がキッスした女性の口のでっかいことを、面白おかしく皮肉ったジョークである。

- ⑦ **“You seem to like his attentions. Why don't you marry him?”**
“Because I like his attentions.”

<あなた、あの方に、いろいろと親切にされるのがお好きなようですわね。ならば、どうして、いっそのこと、あの人とご結婚なさらないんですの>

<わたし、あの方の親切な行為（厚意）だけが好きなんですからですわ>

これは、女性のしたたかさを揶揄したジョークである。

- ⑧ **About the only time the average woman is a good listener is when money talks.**

「普通の女性が真剣になって耳を傾けるのは、だいたい、金に関する（金がものをいう）話の時だけのようである。」

これは、女性の金に対する執着心を揶揄したジョークである。

- ⑨ **When a girl tells you she's insulted on the streets three or four times every day it's hard to tell whether she's bragging or complaining.**

「女の子が、毎日、道で、3回か4回、私、きまって、からかわれるのよと話す時、それは、はたして、その子が自慢しているのやら、愚痴を言っているのやら、その判断は、極めて難しいものである。」

これは女の子が、自分がかわいいということを、さも自慢げに仄めかした、微妙なジョークである。

⑩ A woman never knows how young she looks until she has her portrait painted.

「女性というものは、自画像を描いてもらうまでは、自分自身の若さ加減というものが、どんなものであるかということに関しては、さっぱり分からぬものである。」

これは、女性というものが、自分の美貌に対して抱く幻想は、実に恐るべきもので、画家によって自画像でも書いてもらうまでは、分からぬものである、否、それでもなお分からぬということを揶揄したジョークである。

⑪ They were having a terrible battle. It raged far into the night and finally he couldn't take it any more so he adopted the position of "peace at any price."

"I was wrong" he repented. "Now does that satisfy you?"

"NO!" She shouted. "You must admit I was right."

「彼らは猛烈な夫婦喧嘩をしていた。しかも、その喧嘩は夜遅くまで、荒れ狂った。そこで、とうとう、彼(夫)はこのような喧嘩に我慢できなくなってしまったので、〈絶対平和主義〉の立場をとることにした。それで、彼は〈俺が間違っていたことを認めるよ。さあ、これで、君も満

足だろう」と言って、自分の非を悔いた。ところが、どっこい、彼女（妻）はくともんでもない。私、満足なんか全然してないわよ。あんたが、私の方が正しかったということ、きちんと認めるまでは、絶対にだめよ」と大声で言った。」

これは、夫婦喧嘩において、妻が自分の意地っ張りを、最後までとことん貫こうとする、あらわな態度を皮肉ったジョークである。

⑫ **Dubin, the accountant, had always impressed the theory of economy upon his wife, Doreen. Now he was very ill and rather than hire a nurse she was caring for him. Slowly she filled the tablespoon with prescribed liquid and held it out to him. “I won’t take it,” Seymour shouted. “It tastes awful.”**

“But, sweetheart,” pleaded Doreen. “You can’t die and leave all this expensive medicine wasted.”

「妻のドリーンは、夫である会計士のデュービンに、いつも儉約の仕方について、さんざん説教されていた。そんなある日、夫が重病に罹り、倒れこんでしまったが、看護婦を雇わずに、妻のドリーンが夫の看護にあっていた。妻はゆっくりとテーブルスプーンを、処方された液体でいっぱいにして、それを夫に差し出した。すると、夫のシーマーはくこんなまずいもの、飲めるもんか。俺は絶対に、こんなものは飲まないぞ」と言った。すると、妻のドリーンはくだけど、あなた、何ですよ。あなたがこの高価な薬を全部残して、無駄にしてしまうなんてことは、私、許しませんわよ」と、いとも優しい口調で言った。」

これは、妻が日頃から、夫に対して抱いていた、恨みを晴らした復讐を皮肉ったジョークである。

⑬ “Darling,” said the affectionate husband, “I’ve insured myself for \$ 50,000 so if anything happens to me, you will be provided for.

“Good,” said the affectionate wife, “now you won’t have to call the doctor every time you feel sick.”

「愛情豊かな夫がかみさんに＜おい、俺は、今度、5万ドルの保険に入ったよ。だから、もしも、今度、この俺に、万が一、どんなことがあっても、君は大丈夫だよ＞と言った。

すると、今度は、やはり愛情豊かな妻が、＜そりゃよかったわね。あなたが、気分悪くなった時はいつだって、医者と呼ぶことは、しなくてもいいものね＞と言った。」

これは、夫の善意を踏みにじった妻の、したたかさを皮肉ったジョークである。

⑭ She lay on the couch and began to tell the psychiatrist about what she’s done the past few weeks. “I bought a rabbit,” she revealed, “and fed it to my husband every day for dinner.”

“What did he say?”

“He didn’t say anything,” she said, surprised. “He just looked at me with his big pink eyes.

「彼女は寝椅子に仰向けに休みながら、精神科医に、彼女が過去2, 3週間の間にしたことを話し始めた。で、彼女は＜私、1匹のうさぎを買って、毎日、夕食の時に、その肉を夫に食べさせたいです＞と、秘密を漏らした。

＜旦那さん、何かおっしゃいませませんでした？＞

すると、彼女は驚いたような顔をして、＜夫は何も言いませんでしたが、ピンク色の大きな目で私をじろじろと見ておりました＞と言っ

た。」

これは、精神異常の妻が、精神科医にもらした、異常と言うか、奇異な言動を揶揄したジョークである。

⑮ Give a woman an inch and she thinks she's the ruler.

「女というものは、ちょっと親切にしてやると、すぐにつけあがるものである。」

これは女^{おんな}心の愚かさと言うか、増長ぶりを揶揄したジョークである。

⑯ If you really want to know a woman's bad points praise her to another woman.

「もしも男性の皆さんが、ある女性の欠点を本当に知りたいと思うのであれば、その女性の事を、別の女性に褒めそやしてごらんください。(そうすりゃ、いっぺんに分かります)」

これは、女性の本性を知るには、女性同志のライバル意識を利用するのがよいと言う、実に皮肉な心理を揶揄したジョークである。

⑰ The woman was happily showing off her new mink coat. "It was nice of your husband to buy you that fur coat," said a friend.

"He had to," replied the woman. "I caught him kissing the maid."

"How dreadful. Did you fire her?"

"No." She smiled. "I still need a new hat."

「ある1人の女性が、いかにも楽しそうに、自分の新しいミンクの

コートを、友達に見せびらかしていた。その時、ある1人の友達がくあなたに、こんな（高価な）毛皮のコートを買ってくれるなんて、あなたのご主人って、ずいぶん優しい方ね」と言った。

すると件の女性はくだって、主人はどうしたって買わなければならなかったのよ。私が、主人がメイドとキスをしている現場を取り押さえてしまったもんだから

くあら、ひどい。じゃあ、すぐに首にしちゃったんでしょ

すると、件の女性は、にっこりほほえんでくいえ、そんなことはしませんでしたわ。だって、私には、もう1つの新しい帽子が要るんですもの」と言った。

これは、主人の浮気の現場を目撃したことを口実に、夫に強請^{ゆす}りしかけるといった、女性心理のあさましさを揶揄したジョークである。

⑱ “Do you prefer talkative women or the other kind?”

“What other kind?”

く君はおしゃべりな女と、そうでない種類の女とでは、どちらが好きかね

くそのほかに、どんな種類の女がいるかね

これは、女性特有の、おしゃべり好きという単純な本性を揶揄したジョークである。

⑲ “I lost my wife in a fire. Her dress caught.”

“Burnd alive?”

“No. Luckily the firemen arrived on time and she was drowned.”

くぼくは、かみさんを火事でなくしてしまったんだ。洋服が引っか

かってしまったもんでね>

<すると、焼死ということなんだな>

<いや、それが違うんだ。消防夫が遅れずに、時間通りに到着してくれたことは、確かに、幸いだったが、そのお陰で、女房のやつ、放水によってできたプールの中で、溺死してしまったんだ>

これは、女房の不意の死を、ユーモラスに皮肉ったジョークである。

⑳ **Finger was startled to see the nonchalant way Shimmel was taking the fact that his lady love was seen with another man.**

“You said you love her and yet you saw her with another man and you didn’t knock the guy down?”

“I’m waiting.”

“Waiting for what?”

“Waiting to catch her with a smaller feller.”

「フィンガーは、シンメルが、自分の恋人が別の男と一緒にいるという事実を目撃しても、一向に平然としているのを見て、驚いた。

<君は、彼女を愛していると言ったけれど、彼女が別の男と一緒にいるのを見ても、そいつを殴り倒さなかったのは、一体、どうしてなんだい>

<実を言うと、俺は待っているんだよ>

<一体、何を待っていると言うんだい>

<彼女が、もっと、ぐっと身体のちっちゃい奴と、一緒にいるところを、捕らえてやろうと思って、待っているんだよ>

これは、夫の臆病と言うか、意気地のなさを皮肉った、痛快なるジョークである。

② The young man had just proposed marriage to his lady love and she had turned him down.

“If you don’t marry me immediately,” he threatened.

“I’ll go to the lake, cut a hole in the ice, dive in and drown myself.”

“Why this is April. The ice won’t cover the lake for eight months!”

“Okay, then I’ll wait.”

「若者が恋人に結婚を申し込んだが、その瞬間に、素気もなく断られてしまった。そこで、彼はくもしも君が、いますぐこの僕と結婚してくれなければ、いっそのこと、湖に行って氷を割って穴を作り、その中に飛び込んで、溺死してやるぞ」と言って、脅迫した。

その時、彼女はく何言っているのよ。今、4月よ。だから、あと8ヶ月間は、湖に氷がはるということはないわよ」と言った。

すると、彼はく分かった。それじゃ、いいよ。僕は、その時まで待つことにするから」と言った。

これは、若い男の純情な心を弄ぶ、若い女の非情、かつ、冷徹な心理を揶揄したジョークである。

② The district attorney was cross-examining the murderess. “And after you had poisoned the coffee and your husband sat at the breakfast table partaking of the fatal dosage didn’t you feel any qualms? Didn’t you feel the slightest pity for him knowing that he was about to die and was wholly unconscious of it? As you sat there didn’t you feel for him at all?”

“Yes,” she answered. “There was just one moment when I sort of felt sorry for him.”

“When was that?”

“When he asked for the second cup.”

「地方検事が女性の殺人犯を尋問しながら、＜それで、あなたがコーヒーに毒を盛った後、あなたの夫が朝食の食卓の前に座って、飲めば確実に死ぬと言う、恐るべきコーヒーを飲んでいた時に、あなたは、良心の呵責というものを感じませんでしたか。つまり、あなたは、夫はまもなく死ぬことになるが、夫自身は、そのことをまったく知らないでいるということを知っていて、いささかなりとも、憐憫の情というものを感じませんでしたか。あなたがそこに座っていた時に、同情の気持ちなど全然、露たりとも感じませんでしたか？＞と言った。

＜いえ、ありませんでした。夫がちょっと可愛そうに思われ、幾分かの同情の念が湧いた時が、たったの一瞬ありました＞

＜それは、いつでしたか＞

＜それは、夫が2杯目のコーヒーを欲しいと言った時です＞」

これは、夫を冷然と毒殺した妻の、非情なと言うか、残酷な冷血漢ぶりを揶揄した痛烈なるジョークである。

㊸ His wife was brooding all day and Seymour couldn't stand it. "What's wrong sweetheart?" he asked.

"That terrible Doreen Dubin next door has exactly like mine," she replied, dabbing away an angry tear.

"And I suppose you want me to buy you a new one?"

"Well," she said, "it's a lot cheaper than moving."

「彼の妻は1日中ずーっと考え込んでいたので、シーモアには、それがどうにも我慢できなかった。それで、彼は思い余って、＜おい、お前、一体どうしたんだ＞と聞いてみた。すると、彼女は怒りの涙をハンカチでぬぐい、＜お隣の、あの、いやなドーリン・デュービンが、なんと、私のとそっくりの帽子をかぶっているのよ＞と言った。

＜それじゃ、何だね。君は僕に、新しいのを買ってもらいたいと言う

訳なんだね>

「もちろんよ。その方が引越しなんかするよりも、ずっと安上がりでいいと思うんですけどね」と彼女は言った。」

これは、夫の浮気を理由にねだる、女性の心理のしたたかさを揶揄したジョークである。

④ The old maid went to the doctor and told him she had a recurring dream every night about a young handsome man who wanted to flirt with her and the dream was keeping her awake. The doctor prescribed an extra-strong sleeping-pill.

A few days later she was back again. “Don’t tell me you aren’t sleeping these days?” said the doc.

“Oh, I’m sleeping fine now,” she replied. But to tell you the truth I certainly miss that young man.

「あのオールドミスは医者のところに行って、毎晩夢の中で、彼女と駆け落ちしたいと言ってせがむ、若くて、ハンサムな男のことが繰り返して現われるので、お陰で（その夢のために）眠れなくなってしまって、困っているんですと言った。すると、医者は彼女のために、特別強い睡眠薬を処方してやった。

2、3日すると、彼女は、また、病院にやって来たので、医者はくまさか、何でしょ、ここんところは、眠れないなどは、おっしゃらないでしょうね>

すると、彼女は「ええ、もちろんです。ここんところは、お陰さまで、すごーくよく眠れるんです。だけど、本当のことを言いますとね、もう、あの青年に会えなくなってしまって、とても淋しくってしょうがないんです」と言った。」

これは、欲求不満のオールドミスが、若くてハンサムな男に対して抱く、半ば病的執念を揶揄したジョークである。

㉕ **The woman called to complain of a robbery.**

“There is no honesty these day,” she cried. “My maid ran off with three of my best dresses. The ones I smuggled through customs from my trip to Paris.”

「あの女性は、警察官に電話して、盗難に遭ったと言って、さんざん愚痴をこぼした。

つまり、彼女は<最近、何ね、およそ、正直と言うか、誠実と言うものが、まったく、無くなってしまったわね。私の家で働いていたメイドときたら、私の大事にしていた、いっちょうらの洋服のうち、3着も持ち逃げしてしまったのよ。悔しいじゃない。しかも、それは、私が、かつて、パリを旅行した時、帰国の際に、税関の目をごまかして、こっそり持ち込んだものだったのよ>」

これは、したたかな女性の、まことをもって理不尽極まる言い分を揶揄したジョークである。

㉖ **Old maid: “I hate to think of my youth.”**

New maid: “What happened.”

Old maid: “Nothing.”

古いメイド<私はね、とにかく、私の青春時代のことを思い出すのが、
大嫌いなのだ>

新しいメイド <一体、何があったのだ>

古いメイド<何もなかったからなのよ>

これは、オールドミス^の性に対する欲求不満を揶揄しているものの、いささか、悲哀と同情を禁じえないジョークである。

㉗ **The best way to approach a woman with a past is with a present.**

「^{バスト}**past**つまり、過去を持った女にアプローチする最良の方法として、^{プレゼント}**present**を持って行くのが、何と言っても、一番である。

これは、過去を持った女性を攻略する方法としては、プレゼントするのが一番といった、女心のあさましさを露骨に揶揄したジョークである。

※**past** と **present** の対比ということが、このジョークを一段と面白いものになっている。

㉘ **When Mrs. Brown arrived home with her latest purchase it turned out to be a very expensive Dior creation. “Where am I gonna get the money to pay for it?” Brown demanded.**

“Darling,” said the missus, “you know I’m not inquisitive.”

「ブラウン夫人が、つい最近買った物を抱えて帰宅した時に、それがなんと、大変高価なディオール^の創作であることが分かった。そこで、夫のブラウンはくはたと、これに支払う金を、一体、どこから苦面したら良いかな」と妻に聞いた。

すると、夫人はくねえ、あなた、私って、何事においても、とやかく詮索しないタイプの女ってこと、あなた、よくご存知のはずでしょ」と言った。」

これは、夫の浮気を口実に、強請りをかけるといった、女性心理のあさましさを揶揄したジョークである。

⑲ The scantily clad southern girl was brought into the court, where she got very flip with the judge, who admonished her for not dressing sufficiently and fined her \$5.00 for contempt of court. When asked what the fine was for, she replied, “Fo temptin’ the co’t.”

「ある1人の、いかにも肌のあらわな服を着た南部の女性が、裁判を受けるのに、(役人によって)法廷に連行された。が、そこで、こともあらうに、その女性は裁判官に対して、随分とふまじめなと言うか、みだらな態度をとった。そのため、裁判官は、彼女がいやしくも厳肅な法廷に出廷するに相応しく、ちゃんとした服装をしていないという理由で、彼女に訓戒を与えた上で、なお、法廷侮辱罪として、5ドルの罰金を課した。ところが、彼女は(周囲の者たちから)なんで罰金なんか払えと言われたのよ、と聞かれた時、<なにね、裁判官を誘惑したからさ>とさりげなく答えた。」

これは、相手構わず、見境なく、色仕掛けで男を誘惑しようとする女性の、あさはかなと言うか、愚かな心理を揶揄したジョークである。

⑳ “You men are all beasts.”

“What are you here for?”

“I love animals.”

<あんたがた、男は、みんな、^{けだもの} 獣 ですよ>

<じゃ、なんで、あんたはここに、いらしたんだね>

<わたし、動物が好きだからですよ>

これは、女性の、男性を求めて止まぬ本性を、赤裸々に揶揄したジョークである。

③ A mother, unable to find a baby sitter and being a strong music lover, decided to take the child to the concert hall where a famous symphony was to be played. She warned the little girl to sit quietly. After two long-drawn-out movements the child turned to her mother, who was applauding hysterically, and asked, “May I scream now?”

「母親はベビー・シッターが見つからなかったけれども、熱烈な音楽愛好家であったので、ある有名な交響曲が演奏されることになっていたコンサート・ホールに、子どもを連れて行くことを決心した。母親は子どもには、演奏中は静かに座っているようにと、くれぐれも注意しておいたので、長々と続いた2楽章が終った後、子どもは母親の方を向いた。すると、母親は、異常に興奮して、拍手喝采していたので、子どもはくお母さん、あたし、もう思いっきり泣いていいの」と聞いた。」

これは、母親の熱狂振りが、子どもの心理に及ぼした影響を、ユーモアたっぷりに皮肉ったジョークである。